

「官話」研究における「漢訳聖書」  
の位置付け

内 田 慶 市

# 「官話」研究における「漢訳聖書」 の位置付け

内 田 慶 市

「官話」というものに、「北京官話」「南京官話」「西南官話」とかいう区別があり、さらに、中でも「南京官話」あるいは「南京語」が中国においては「より標準的ことば」であることは、欧米人の「官話資料」にも早くから指摘されてきたことである。

In this wide area, the Nanking, called 南官話 and 正音 or true pronunciation, is probably the most used, and described as 通行的話, or the speech everywhere understood. The Peking, however, also known as 北官話 or 京話 is now most fashionable and courtly, and like the English spoken in London, or the French in Paris, is regarded as the accredited court language of the empire. The two most striking differences between them, consist in the change of the initial k before i and ü into ch or ts, and the distribution of words in the juh shing among the other tones.

(W. Williams 1874 《A Syllabic Dictionary of the Chinese Language》)

The Nanking mandarin, he observes, is more widely understood than that of Peking, although the latter is more fashionable;

(Wade 1876 《語言自選集》 Preface XV)

古屋 (1991) によれば, Francisco Varo 《Arte de la Lengva Mandarin (官話語法)》(1703 Canton) にもすでに、「官話」の基礎方言は「南京語」であるという次のような記載が見れるという。

los naturales de la provincia de Nanking y los de otras se hablabien el Idioma Mandarin

〔南京省和其他地方（在這些地方人們說官話說得很好）的居民〕

ところで、その実態はと言えば、「音韻」に関しては、かなりその違いが明確にされているのに対して、「語彙・語法」に関しては、いまだ明確にされたとは言いがたいものがある。

「音」については、特に「正音」ということでは、佐藤 (1988) の指摘のように、一般的には「南京音」が採用されてきた。これは、すでに「北方音」が「標準音」とされている時代の Mathews (1938) に至っても変わりはないようである。Wade や Mateer で「北方音」を採用しているのはむしろ例外的であるといえる。

W. Williams によれば、官話には南と北の二つの種類があり、そのうち北官話すなわち北京官話は宮廷の言語で、典雅で fashionable であるけれども、それより南官話のほうがずっとひろく用いられ、天下共通の言語として全国的に理解されるというのである。それ故、W. Williams はその本格的な中国語字典において、どうしてもこの南官話（南京官話）の音を正音として採用せざるをえなかったわけである。

19世紀において欧米人が官話の音と称したのは、じつは一般民衆の日常の話しことばの発音をいつているのではなく、知識人・読書人によって用いられ、あまり特定地域にかたよらない読書音ないし文言音というものを指しているらしい

「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け (内田)

(佐藤昭 1988 <清末民国初期の官話方言の音韻一(I)> 『北九州大学外国語学部紀要』第64号 99—100p)

The language spoken in practically every province of China, with the exception of the southern coastal provinces, was formerly known as Kuanhwa, (官話), commonly called Mandarin. There were three marked varieties of this speech, namely, Northern, Southern, and Western. These three varieties were to some extent represented by the speech of educated men in Peking, (Peiping), Nanking, and Chengtu. In 1918, after further discussion, certain changes were made, and a National Phonetic Dictionary (国音字典), compiled.

The phonetic alphabet has since been slightly revised, and the present Standard Dictionary of the National Language, (標準語大辞典), has dropped the fifth tone.

(Mathews 1938 《英華合璧》 XV)

内田 (1991) でも「正音」ということで、一つの問題を提起した。すなわち、これまでの「官話資料」における、「語音」は「南京音」で「語彙・語法」は「北京語」という可能性と、「語音」も「語彙・語法」も「南京語」という可能性である。その後の調査では、前者の可能性が高いものが多いという感じであるが、前稿で取り扱った《華語拼字妙法》について言えば後者である。(同書の語彙・語法については近く別に論ずる予定)

さて、「官話」の「語彙・語法」について、「北京官話」か「南京官話」かを見る時、これまでその根拠とされてきたのは、太田 (1965) (1969) であった。

確かに、太田論文は、よくぞあの時代にあれだけの資料を発掘され (たとえば「清代の北京語」(1950)を見よ)、極めてコンパクトに「北京語の文法特

点」をまとめられたものと感服するばかりであり、まさに根拠とするに足りうる素晴らしい成果であることは言うまでもないことである。この点を十分承知した上でなお、もう一度再点検の必要はないかと考えるのである。「レーニンから疑え」とはもはや古臭い言葉かもしれないが、やはり「すべてを疑え」である。

太田(1969)で言われているのは、あくまで最終的には「北京語の文法特点」であり、「北京語」はこの基準により明確にされる。しかし、この基準にいくつあてはまれば「北京語」で、いくつあてはまらなければ「北京語ではない」ことになるのかということがある。また、この基準をみたまないものは結局どの「官話」ということになるのか。

太田(1965)はおもに「南京語」との比較ということであるが、そこで先生ご自身次のように述べられている。

小方言のうち特に優勢なのは南京官話であるから、われわれが文字によって記された資料を通じて考える場合、これだけを考察しておけばほぼ間に合うであろうし、そもそも資料の不足から全面的な考察は困難というのが実状である。そこで本稿では、北方語ないし是北京語の文法を、主として南京官話のそれと比較することにより、その特色を明らかにすることを目的とする。もっとも北方語(北京語)といい南京官話といってもその実態はあまり正確に記述されているわけではないから、推定の域を出ない点があることをまぬがれない……(南京官話は)……やむを得ず、便宜的な方法として次の2を書参考することにした。

(5)官話指南 九江書会著1893年……

……北京語で長江流域には通用しにくい個所を南京官話に書き改めたものである。その体裁は改訂個所のみ小字で2行とし、右側が原文(北京語)、左側が改訂文(南京官話)となっている。この改訂が南京官話によるとは明記してあるわけではないが、発行地の九江が南京官話地区であるところから推定される。

「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け (内田)

(大田1965 38—39 p)

すなわち、「南京語」の資料の「便宜性」をきちんと述べておられるのである。

もちろん、九江書会本『官話指南』は以下の現代方言調査資料からも確かに「南京語」の資料と見ることはできる。

#### 江淮方言

安徽江蘇兩省的長江以北地区（徐州一帶屬北方方言区，除外）和長江以南九江以東鎮江以西地帶。

(袁1983)

#### 江淮官話

俗稱下江官話，通行於安徽省長江兩岸地区，江蘇省長江以北大部分地区，長江南岸鎮江以上、南京以下地区以及江西省沿江地帶。

(錢乃榮主編1990《現代漢語》23 p)

#### 江淮官話区

①洪巢片一七十八個市県，其中十九個市県在安徽省南部，兩個県在浙江省

②泰如片一十一個市県，全在江蘇省

③黃孝片一十九個市県，十六個市県在湖北省，三個市県在江西省

(李榮1989《漢語方言的分區(中國語言地圖集的說明稿)》

《方言》89—4)

次の記載も本書と「南京語」の関係を見る上で興味深いものである。

九江 華中書館 係在九江的一些傳教士於19世紀八十年代末創辦的。

(葉再生1990〈現代印刷出版技術の伝入与早期的基督教出版社〉《出版史料》90—1 108 P)

約在二年前，九江的传教士集会成立了一個小冊子協會，在書館里辦公。  
T・傑克遜 (Jackson) 牧師被選為會長，……〈官話指導〉……協會委員會成員有……G. A. 斯圖爾特 (Stuart) ……

(G. 麦金托什〈聖經出版協會和小冊子出版協會〉《出版史料》89—3/4 181 P)

上の資料にみえる〈官話指導〉は、あるいは『官話指南』である可能性もある。また、Methodist Episcopal Mission (美以美会) の伝教教師でのちに Nanking University の院長となった G. A. Stuart の名が登場してくることも本書と「南京」の関係を暗示しているようである。

このように、本書を「南京語」とみることに問題はないと思われるが、それでもたとえば次のようなことも考慮に入れる必要はないだろうか。

官話区有五個市県：九江市、九江、瑞昌、贛州市、信豊。江西的官話分為南北兩種，贛北的九江市、九江、瑞昌屬江淮官話，贛南的贛州市和信豊縣城屬西南官話。他們分別受附近的贛語或客家話的影響，帶有贛語和客家話的某些特征。……

九江贛州五處“太陽”都叫“日頭”、“颶風”都說“起風”……

(顏森1986〈江西方言的分區(稿)〉《方言》1986—1)

すなわち、九江は贛語と客家語に隣接しており、二つの言語の影響をなにかしか受けているという指摘は重要であるように思われる。

そして、なにより私達に欲しいのは、上の資料にも2つだけ見えるような、

「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け（内田）

いわゆる「南京語」を確定する「鑑定語」である。「北京語の文法特点」にあてはまらないから「南京語」という方法（排除法）に加えて、「これがあるから南京語」という方法、つまり「南京官話の語彙・語法の特徴はこれだ」という真正面からの方法である。

この方法を確立したとき、恐らく私達は太田論文の先見性・卓越性を再確認をすることになると思われるが、しかしそれに取り組むことは決して無駄ではないと考えるものである。

さて、「南京官話の語彙・語法の特徴」を正攻法で明らかにしていこうとするとき考えられる方法の一つは、現代の方言調査をもとにさかのぼるという方法であり、いま一つは「南京官話」の文献資料の発掘・総点検である。

前者はとりあえず中国にまかせるとして、後者では、欧米人の官話資料にみえる「南京語」（Southern）と注したものの総整理（たとえば尾崎実く官話類編所収方言詞対照表）の類のもの）や南京語の「漢訳聖書」にみえる「語彙・語法」の整理というものが考えられる。

「漢訳聖書」は欧米人の官話資料にもよくとられるものであり、極めて重要である。

This series of progressive studies in the Chinese National Language or Kuoyu, is a successor to the well-known Mandarin Primer by F. W. Baller, which is now out of print. ……

To meet this need, examples have been culled from all sorts of books in Kuoyu by modern writers, as well as from the Chinese Bible and other sources.

（《英華合璧》PREFACE）

「漢訳聖書」のうち「官話」研究に重要と思われるものを、志賀（1973）等



をもとに、いくつか年代順に示せば以下の如くである。

- |            |                                      |      |  |
|------------|--------------------------------------|------|--|
| ①1750—1800 | 新約聖經                                 | 国語   | 魯士波柔 (Poirot de Louis)   |
| ②1857      | 新約聖經                                 | 国語   | 麦都思 (Walter Henry Medhurst)<br>施敦力 (John Stronach)   |
| ③1866      | 新約聖經                                 | 北京語  | 艾約瑟 (Joseph Edkins)<br>(北京出版) 丁韞良 (William A. P. Martin)<br>包約翰 (John Shaw Burdon)<br>施約瑟 (Samuel Isaac Joseph)<br>白漢理 (Henry Blodget) |
| ④1874      | 旧約                                   | 北京官話 | (上海出版)   |
| ⑤1878      | ?                                    | 北京官話 | (上海出版)   |
| ⑥1888      | KUAN-HUA SIN IOH TS'UEN SHU (LONDON) |      |  |
| ⑦1889      | 新約全書                                 | 国語   | 楊格非 (Griffith John)  |
| ⑧1899      | 新約聖書                                 | 官話   |  |
| ⑨1907      | 新約全書 (和合訳本)                          | 国語   | 狄考文 (Calvin W. Mateer)<br>富善 (Chauncey Goodrich)<br>文牧師 (George Sydney Owen)<br>鮑康寧 (Frederick William Baller)<br>鹿依士 (Spencer Lewis)  |
| ⑩1913      | 馬太福音 (中西字)                           | 官話和合 | 美国聖書協会   |
| ⑪1916      | 新約全書                                 | 官話和合 | 大英聖書公会   |
| ⑫1919      | 官話和合訳本                               |      | 大美国聖經会   |
| ⑬1939      | 国語和合訳本 (1919の修訂)                     |      |  |

②については顯 (1989) によれば次のようにある。

麦都思和施敦力南京官話訳本，儘有《新約》，上海出版。此為外国伝教士

「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け（内田）

首次用白話訳経，以求出版後供南方中国平民閱讀。

（顧長声1989 <<聖經> 中訳本版本簡介>《出版史料》1989. 1  
120 P）

すなわち Medhurst による「南京官話」訳である。

Medhurst Version は Spillett, Hubert. W. の《A Catalogue of Scriptures in the language of China and the Republic of China》(British and Foreign Bible Society, London 1975) によれば1854年に「馬太伝」が翻訳され、その後「新約」が1857年に翻訳されたとある。同書によれば以後多くの Medhurst 版が出版されているようである。ただし、筆者はいずれも未見である。

③については志賀（1973）には次のようにある。

この訳本は、北京における委員会の手によって成されたものである。これは1860年頃、先ず艾約瑟によって開始され、委員会の成立はその後であった。……この際も「上帝」と「聖霊」との訳語に関しては熱烈な論争がかわされた。同訳本は忽ちにして文言訳聖書の地位を奪い、1907年和合訳本の出版を見るまで多年利用された。

（志賀 49 P）

これが最初の「北京官話」訳本であろうが、これも未見である。

⑥の《KUAN-HUA SIN IOH TS'UEN SHU HAN-TSI FAN LO-MA-TSI》(LUEN-TUEN TA-ING-KUEH SHENG-SHU-HUEI INTIH 1888 383p) は、香港 United Bible Societies Asia Pacific Centre の駱維仁 (I-Jin Loh) 博士よりコピーを頂き筆者の手元にあるが、この「音声表記」は明らかに「南京音」に基づいている。（この点については黄典誠（1987）に詳しい）「語彙・語法」に関しては現在調査中であるが、「南京官話」に傾い

ている感じはある。また本書は、「J. ライヒマン氏旧蔵初期中国・アジア研究資料集成」にも収められており、同集成は愛知大学に所蔵されている。

なお⑧は、⑥の漢字版であり、⑥で「聖靈」と訳されているところが「聖神」となっている点が異なるだけである。

また、志賀（1973）に「1888新約 London W. Cooper ローマ字」というのがあるがこれと同じものかどうかはわからない。

⑦は願（1989）や志賀（1973）によれば次のようにある。

蘇格蘭聖經会出版

（願 121 P）

又一方、彼はこの文語訳本（1889＝筆者）を素材として、1899年には新約聖書国語訳本をも作成した。それは一既成の北京官話訳本（1866を指す＝筆者）は北方人には適していても、他地方には不向な点が少なくなかった一理由に基き、大英聖書公会及びスコットランド聖書会が連合して彼に要請したものであった。

（志賀 35—36 P）

すなわち「南京官話」訳本ということになるが、これも未見であり Medhurst 版との違いなど詳しいことは今後の調査に待ちたい。

⑨の1907年（大清光緒33年歳次丁未）本は大美国聖經会の発行によるものであり、英語のタイトルは《UNION VERSION OF THE NEW TESTAMENT KUAN HUA TRANSLATION (SECOND EDITION)》となっている。

本書には Mateer（狄考文）による英文の PREFACE（4 P）と中文序（6 P）が付いているのが特徴であるが、いま、その一部を以下に示す。

### 「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け（内田）

耶蘇降世一千八百九十年，各会的教士，聚在上海，特派委酌，選人重修官話聖經……

大家的意見是用淺白官話，一念出來，平常人就能德明白。所以一面竭力的躲避土話，一面竭力的躲避文理，正在兩難之間，不容易躲避清楚。有時候沒有通行的官話，不得不用幾句文理，或用字面好講廣行的俗話。……

這新翻的比北京舊翻的，多用一千多新字眼，這樣就更使話語親切有味，……

此書既翻了十幾年，翻譯人自必變換，這近四年直翻成功的有五位教士如下。

大美国教士 富善 北京 (Chauncey Goodrich)

大英国教士 文書田 北京 (George Owen)

大英国教士 鮑康寧 南京 (F. W. Baller)

大美国教士 鹿依士 重慶 (Spencer Lewis)

大美国教士 狄考文 登州 (C. W. Mateer)

除了這五位以外，還有五位教士，或多或少用過工夫，各教士如下。

大美国教士 柏亨利 北京

大美国教士 倪維思 烟台

大英国教士 費 武昌

大美国教士 林 清江浦

大英国教士 陳佐仁 貴州

また、願 (1989) および志賀 (1973) によれば次のようにある。

1890年新教伝教士在上海舉行全国大会，議題之一是各派如何通力合作翻譯《聖經》，以求減少在譯名問題上各版《聖經》的混亂現象。英、美和蘇格蘭三個在華聖經會正式建議立即進行“和合譯本”的翻譯，分文理、淺文理、官話三種譯本出版稱“上帝”和“神”兩種版本。……官話和合譯本有七名伝教士參加翻譯，到1919年出版時，僅有一名伝教士健在，親眼見到這

個版本出版。……這是外國傳教士在華集體翻譯的最後一版中文《聖經》，1939年修訂後改名為國語和合訳本。1980年中國基督教協會決定重印聖經時，仍以此1919年版官話和合訳本為依拠影印出版。

(顧 121 P)

新約聖經の出版は1907年、聖經全書の出版は1919年2月であった。

(志賀 51 P)

これは Mateer を中心として Baller, Goodrich といったそうそうたるメンバーによる「官話（おそらく北京官話）」訳聖經であり、訳者の中国語に関する信頼性からみても、また、これ以降の「漢訳聖經」はこれをもとに改訂がされていったということから考えても、これを「漢訳聖經」研究の基礎に拠るべきであろう。

「漢訳聖經」の発行は膨大な数にのぼり、同じ版のものがいろんな場所、時期に出されており、それを整理するのは大変な作業ではある。たとえば、次のような発行部数に関する記載もみえる。

1812—1814年協会对在華華的馬礼遜 (Morrison) 牧師（後來成為博士）的〈新約全書〉出版準備工作給予了幫助，到1814年1月印出2,000冊。……從1888—1893年這六年中〈聖經〉的發行量是1,327,991冊，其年平均量為220,000多冊。

(G. 麦金託什〈聖經出版協會和小冊子出版協會〉《出版史料》1989—3/4)

しかしながら、代表的・基本的な版本を押さえてゆけば、コンパクトな形にまとめることは可能なはずである。

とりあえず、日本国内の現存する「漢訳聖經」の書誌的整理をおこなう一方

「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け (内田)

で、手元にある狄考文(1907)のもの、  
「南京官話」本と思われる1888年出版のローマ字本ならびにその漢字本(1899年版と1900年版)との比較を行いながら「南京官話」の語彙・語法の特徴」という問題にせまっていきたいと考えている。

1991. 12. 9

〔付記〕

本稿は1991年12月8日に行われた「中国近世語研究会秋季研究集会」(大東文化会館)において「漢訳聖書について—官話研究の方法をめぐって」と題して報告したものをもとに稿を起こしたものである。また、本稿は平成3年度関西大学文学部共同研究(「漢訳聖書の基礎的研究」)の一部をなすものとして位置付けされる。なお、引用文中の「簡体字」は印刷の都合上「常用漢字」に統一した。

〔主要参考文献〕

- 志賀正年(1973. 3)『中文訳聖書(Bible)の基礎的研究』天理時報社
- Spillett, Hubert. W. (1975)  
《A Catalogue of Scriptures in the language of China and the Republic of China》British and Foreign Bible Society, London (compiled by Hubert W. Spillett; edited and indexed by the Librarian of the British and Foreign Bible Society)
- 顧長声(1989)〈《聖經》中訳本版本簡介〉《出版史料》1989. 1 上海
- 黄典誠(1987)〈一百年前漢語官音初探〉(「中国語言学会第四届年会」提交論文)
- 太田辰夫(1965)「北京語の文法特点」(『久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念 中国研究』)
- 太田辰夫(1969)『中国語学新辞典』(光生館)の「近代漢語」の項
- 内田慶市(1991)「《華語拼字妙法》の音系—南京官音の一資料」(『中文研究集刊』第3号)
- 古屋昭弘(1991)「清代官話の一資料—ドミニコ会士 Varo の“Arte de la lengua mandarina (官話語法) 1703年刊”」(中国近世語研究会秋季研究集会での研究発表のレジュメ)